



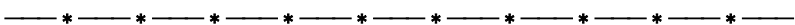
Data

監督：ディン・シェン（丁晟）
 出演：ジャッキー・チェン（成龍）
 /ワン・リーホン（王力宏）
 /ユ・スンジュン（劉承俊）
 /ドウ・ユーミン（杜玉明）
 /リン・ボン（林鵬）/ユー・ロンガン（于榮光）

👁️👁️ みどころ

原題の『大兵小将』が、いかにもピッタリ！時はBC227年の中国戦国時代。秦による統一前の、シンプルな設定ながら波瀾万丈の物語だ。

キーワードは、中国語学習の初心者でもわかる「挺好的（ティン・ハオダ）」。これを「上等だ！」と訳するのがミソだが、そのセリフの中には、トルストイの『戦争と平和』にも匹敵する深遠な人間観が・・・？それを感じとれば、あなたの映画力は満点！



■□■やっぱり、あの時代の映画は面白い！■□■

あなたは中国史における春秋戦国時代を知ってる？まず、秦の始皇帝が天下を統一したBC221年というのが中国の古代史を学ぶ場合の基本中の基本。ヨーロッパではシーザーが死んだのが、BC44年だから、始皇帝の登場はローマ帝国の成立より200年近く前ということになる。そして、BC240年頃の「戦国七雄」とは、秦・楚・斉・燕・趙・魏・韓の七国。本作冒頭にはそんな時代背景を語るナレーションが流れ、中国の最西部にあった強国秦が隣国の韓や趙を滅ぼしたことが報じられる。しかし、それに続いて本作冒頭に描かれる、BC227年に起きたという衛国と梁国との間の「鳳凰山の戦い」は全くの嘘。衛も梁も映画製作上でつちあげられた国だ。しかし、その戦いで両軍の将兵3000人が全滅したという話は、いかにももってもらしい。

それはともかく、死体の山が連なる中、むっくり一人起き上がってきたのがジャッキー・チェン扮する梁国の兵士。その腹と背中には矢が突き刺さっているが、実はこれはインチキらしい。その兵士が捕えたのが、深手を負ったワン・リーホン扮する衛国の將軍。そう

だ！彼を捕虜にして故郷へ連れて帰れば、ご褒美が。兵士がそう考えたところから、物語は怒濤の展開へ……。ちなみに、本作の原題は『大兵小将』。ホントは兵にかかる形容詞は小で、将にかかる形容詞は大のはずだが、原題ではそれが逆。なるほど、本作の展開を見れば、その原題に納得。そう考えると、『ラスト・ソルジャー』という邦題はイマイチで、何か原題をイメージできるものにしてほしかったが……。

■「何でもあり！」が一番■

ジャッキー・チェンの映画はアクション性とコメディ性が大きな特徴だが、大切なのはそのバランス。また、アクション性とコメディ性で映画を楽しむためには、「何でもあり！」が一番。本作の主人公は梁国の兵士と衛国の将軍の二人。本作は、ある意味捕虜を連れて故郷へ戻る兵士のロードムービーだが、そこには「何でもあり！」のエンタメ性がタツパリ詰まっている。

そのストーリーを構成するのは、第1に将軍の弟ウエン太子（ユ・スンジュン）とウエン太子を補佐する指南役のウー（ドゥ・ユーミン）率いる「搜索隊」だが、彼らは一体何を搜索するの？北朝鮮では金正日の3人の息子のうち結局末子の金正恩（キム・ジョンウン）が後継者に決まったようだが、すると後の2人は？もし、それと同じような問題が衛国でも起きていたら……。？したがって、問題の根源はすべてそこに。

第2は、意外な美女（？）を伴った山賊団の登場。彼らには言葉が全然通じないらしいから、最後の最後まで彼らの狙いはわからないが、闘争力だけはピカイチのようだ。したがって、ウエン太子率いる搜索隊もそんな山賊団との対決は極力避けていたが、ずっと一触即発の緊張状態が続いていた。そして、あるきっかけから戦いがはじまると……。？熊の登場はイマイチあつかなかつたが、原案・製作総指揮・武術指導・主演を担ったジャッキー映画における、「何でもありが一番！」というサービス精神は立派なものだ。なるほど、これなら中国で公開された歴代のジャッキー主演作の中で最高の興行収入をあげたということにも納得。

■テーマは、トルストイの『戦争と平和』と同じ？■

本作はジャッキー映画だから娯楽に徹しているのは当然だが、意外とトルストイの『戦争と平和』ばりの深遠な主張も……。？将軍は知識階級だから頭の中でいろいろ考えるのは当然だし、武将としてのプライドも持っているから、死ぬことは厭わず、ただ名誉の戦死をしたいと願っているだけ。したがって、捕虜になるのは死ぬより辛いわけだ。そんな彼が常に先頭に立って戦ってきたのは、平和を守るため。つまり、彼にとつての戦争とは、イコール平和のことなのだ。

これに対し、どんなズルをしてでも生き残ろう、戦争で死ぬなんてバカバカしいというのが兵士の考えで、それにも一理ある。そんな彼の理論は、父親から「3人兄弟のうち2

人は死んでも仕方ないが、1人は必ず生き残れ」と言われたことによってさらに強化されたらしい。梁国の兵士とその捕虜となった衛国の将軍の奇妙な2人旅には、さまざまな試練が襲ってくるが、その中でエンタメ性とともになんな深遠な理論が展開されるから、本作はそれもしっかり拝聴したい。



© 2010 JACKIE & JJ PRODUCTIONS LTD.

2010年11月13日(土)より、TOHOシヅメ 梅田、TOHOシヅメ なんば、TOHOシヅメ 二条、109シヅメ HAT 神戸
ほかにて公開！

■□■ニッポン人俳優はゼロ！ここにも内向き志向が？■□■

鳩山前首相はきわめてノー天気な「東アジア共同体」構想を掲げた。また、奥さんの幸夫人は韓流映画の大ファンらしい。他方、映画の世界では既に中国、香港、台湾、韓国を中心とした「東アジア共同体」的作品が次々と作られている。これは映画の世界において、東アジア共同体内での国境がきわめて弱くなっていることの流れだ。

その結果、本作では香港生まれで国際的大活躍をしているジャッキー・チェンの好敵手(?)の将軍役には、台湾の歌手として大活躍し、近年は俳優や映画監督としての顔もあわせ持つ若手のイケメン、ワン・リーホンが選ばれた。またその弟役は、韓国の歌手兼ソロダンスアーティストであるイケメン、ユ・スンジュンが映画初出演を果たした他、紅一点の歌姫役として登場するリン・ボンも、韓国の若手女優。つまり、日本人俳優には誰一人ジャッキー・チェンからお呼びがかからなかったわけだ。

尖閣諸島における中国漁船船長釈放問題を見ても、日本外交の敗北は明らかだが、その

根本的原因は日本政府の国際的アピール力の無さにある。本作におけるニッポン人俳優ゼロという現象も、そんな体たらく状態と日本全体の内向き志向の現れとしてやむをえないのかもしれないが、いかにも残念。テレビドラマの劇場版で稼ぐばかりではなく、良質な映画も次々と製作されている日本映画界にあっては、そんな外交や政治に負けず、日本人俳優の実力をもっと国際的にアピールしてもらいたいものだ。

■全編をつらぬくキーワードは、「挺好的」■

私のNHKラジオ講座を中心とした中国語の勉強は、9月30日でちょうど1年半となったから、本作でも字幕とセリフを一生懸命に確認！本作全編をつらぬくキーワードは「挺好的（ティン・ハオダ）」。この言葉は、通常では「悪くないね」という誉め言葉だが、本作では「上等だ」と訳されて字幕に表示されている。この言葉を口癖のように多用するのはもちろん兵士だが、この言葉の中にはどんな苦しい状況下でも現実を前向きに受け止めて生きていこうとする庶民の価値観や知恵が詰まっている。数えてはいないが、本編でこの挺好的と語られるシーンは10回以上あるし、後半では兵士と心を通わせた将軍、いや実は、衛国の皇太子も再三この挺好的を。さあ、そんなセリフが語られるシーンをしっかり確認しながら兵士の前向きな姿勢を感じ取り、尖閣諸島問題をはじめ絶望的な状況にある今の日本でも「上等だ」を合言葉にしたいものだが・・・。

2010（平成22）年10月4日記

ジャッキー映画は「種明かし」も楽しみに

1) 香港生まれで、スタントマンとして映画のキャリアをスタートさせたジャッキー・チェン（成龍）は、カンフーアクションとユーモアを両立させた独自の俳優像をつくり上げて大人気に。あくまで禁欲的でカンフー道を極めるかのような雰囲気をもったブルース・リー（李小龙）の本格的カンフーとは全く異質の、『蛇拳』（78年）や『酔拳』（78年）はメチャ面白かった。さらに79年に『笑拳』で監督デビューするや、彼は今日まで次々と監督・製作作品を世界中に送り出すと共に、ハリウッドでも大成功を収める大スターとなった。

2) そんなジャッキー映画に共通するのはエンドロールが流れる中、撮影現場におけるあのシーンこのシーンの裏側が映し出されること。なぜあんなアクションができるの？あんなに激突したらさぞ痛いのでは？本編鑑賞中にいろいろ感じる事がそこで「種明かし」されるから面白い。なるほど、映画の撮影はこんな風にするのかわかり、主演の演技を支える脇役や縁の下の力持ちの重要性がよくわかる。だから、ジャッキー映画を鑑賞するについては、ゆめゆめエンドロールの途中で席を立たないように。

2010（平成22）年10月29日記